

## 清朝統治下のヤルカンドのベクたちの動向

——ムハンマド・ユースフの侵入事件（1830年）への防御の対応を中心として——

河野敦史\*

### **The Action of the Beg Officials in Yarkand under the Control of the Qing Focusing on the Defense against the Campaign of Muḥammad Yūsuf (1830)**

KONO Atsushi

In 1759, the Qing conquered South Xinjiang, where many Turkic Muslims lived. The Qing appointed begs, influential Turkic Muslims, as officials. Under the control of the Qing, beg officials administered South Xinjiang. The Kashgar Khwāja family, descendants of Makhdūm-i Aʿzam, resisted the Qing troops and escaped from the country. From the 1820s to the 1860s, the Kashgar Khwāja family attacked the western cities of South Xinjiang, including Kashgar, Yangi Hisar, Yarkand, and Khotan, with the assistance of the Khōqand Khanate.

This article examines the actions of the beg officials in the defense of Yarkand District against the campaign of Muḥammad Yūsuf. It shows that, under the supervision of Qing imperial agent Bichang, ‘Abd al-Raḥmān, the ḥākīm beg at Yarkand, and other beg officials, gained the cooperation of the ākhunds, islamic religious leaders, and foreigners such as the people of Badakhshān. They mobilized Turkic Muslim troops and residents to defend Yarkand District and *Huicheng*, the muslim city, from Khwāja armies. As a result, the beg officials succeeded in defending some parts of the district and the city. The author argues that the beg officials took effective measures to defend the villages and the muslim city in Yarkand.

キーワード：ベク, カシュガル・ホージャ家, 新疆, 清朝

Key Words: Beg officials, Kashgar Khwāja family, Xinjiang, Qing

---

\* 中央大学政策文化総合研究所準研究員

Associate Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University

## はじめに

本稿においては、1830年（清朝の年号では道光10年に相当する）に、ムハンマド・ユースフ<sup>1)</sup>（Muhammad Yūsuf, ?-1836）とコーカンド軍が、清朝統治下のタリム盆地周縁オアシス地域（現在の中国新疆ウイグル自治区南部、中国領中央アジア）の西部に侵入し、清朝側と交戦した事態を、「ムハンマド・ユースフの侵入事件」<sup>2)</sup>と呼称し、分析の対象とする。本題に入る前に、当該事件に関連する歴史的な背景<sup>3)</sup>に簡単に触れておきたい。

1759年に、清朝はタリム盆地周縁オアシス地域を征服した。清朝は、この地域を「回部」あるいは「回疆」と呼び、各地に清朝軍が駐留する要塞都市（「漢城」と呼称された）を建設して大臣と軍隊を配置した。また回部のテュルク系ムスリム住民に対する行政については、現地の有力者を官吏として任用するベク（伯克）制を施行し、清朝の大臣の監督の下でベクたちが行政を担った。イスラームの宗務者であるアホン<sup>4)</sup>たちに対して警戒感を抱いていた清朝は彼らの権力行使に制限を加えたが、反乱などの重大事態を起こさない限りにおいては、アホンたちのムスリム社会に対する影響力が温存される状態を黙認した。ベクやアホンは、従来から存在したムスリム在住の都市（「回城」と呼称された）や農村に居住し、必要に応じて清朝の役人の指示を受け、有事の際にベクはアホンの協力を受けつつ、回兵（テュルク系ムスリム兵士）を率いて清軍とともに防御の対応に当たった。

なお、宗教指導者としてのアホンの立場がイスラームに関する学識に拠っていたことに対し、次に述べるホージャ（イスラーム聖者裔）の教団指導者としての立場は彼らが先代の指導者から代々受け継いできた道統（教団指導者としての系譜）や血統（聖者の子孫であること）に拠っていた。カシュガルなどの地域には、従来から宗教的権威を有するカシュガル・ホージャ<sup>5)</sup>家が存在した。この一族は、中央アジアのイスラーム神秘主義教団であるナクシュバンディー教団の指導者であったマフドゥーミ・アーザム（Makhdūm-i A‘zam, 1461/2-1542/3）の子孫たちである。彼の第7子ホージャ・イスハーク（Khwāja Ishāq, ?-1599）の系統は黒山党と呼ばれ、これに対して長子ムハンマド・アミーン（Muhammad Amīn, 生没年不詳）の系統は白山党と呼ばれた。彼らは、16世紀後半から17世紀前半にかけてタリム盆地周縁オアシス地域に進出し、黒山党ホージャはヤルカンドに、そして白山党ホージャはカシュガルに根拠を置き、主導権をめぐる抗争した。

この抗争は、白山党ホージャの勝利に終わり、黒山党ホージャは滅んだが、1759年に清朝がこの地域を征服した際に、白山党ホージャは域外へと逐われる結果となった。なお、清朝統治下においても、両派の支持者たちは残存しており、とくにホージャが健在であった白山党支持者たちは域外へと逃れたホージャ及びその子孫と連絡を保っていた。1820年

代から1860年代にかけて、白山党ホージャたちは失地回復を企図し、コーカンド・ハーン国やクルグズの支援を受けて回部への侵入事件を繰り返し引き起こした。これらのホージャの動向に対して、白山党支持者は呼応して蜂起し、黒山党支持者はこれに対抗した。

清朝の回部統治に考究を加えていくうえで、清朝の統治を揺るがすような事件が起こり、ムスリムの一部が清朝に敵対した際に、清朝当局やベクたちなどの各勢力が示した動向は、注目される。清朝統治を揺るがした事件としては、ホージャ家が起こした数次にわたる大規模な侵入事件があり、多くの先行研究も為されてきた。

ホージャ家の侵入事件を扱った先行研究（佐口1963：405-530；加藤1977；Fletcher 1978：361-375, 385-395；加藤1983：21-23；潘1991：90-101, 119-125, 156-163；Newby 2005：95-123, 153-167, 223-226, 232-240；潘2011：113-198；王2012：127-134）<sup>6)</sup>においては、侵入事件への清軍の対応、侵入したホージャたちの動向、回部の白山党支持者の行動、当該事件へのコーカンド・ハーン国の関わりが主な議論の対象とされてきた。近年のKim（2016：90-125）の研究も、ホージャ家による侵入事件の性質に分析を加え、その性質として、ベクたちによる土地開発によって故郷を逐われた人々がホージャの指導のもとに組織化して起こした戦いという側面を強調しており、やはり分析の重点はホージャ方に置かれている。これらの先行研究において、事件中におけるベクたちの行動は、清朝側の侵入事件への対応を論じる中で各都市のベクたちによる清軍への協力が付随的に言及されてきたものの、ハーキム・ベク（都市の行政長官）以下のベクたちが実際にどのような対応を行ったかについては検討の必要がある。

清朝による回部統治の特徴を究明していくうえで、実際の政治的状況に関わる具体的な局面において清朝と様々な関係性を有する各勢力が如何なる動向を示したのかは、注目に値する。とくにムスリム住民の一部分が清朝と敵対した場合において、清朝と現地ムスリム社会の間であって行政を担当していたベクたちが示した具体的な動向を明らかにしなければならない。本稿が、ホージャ家による侵入事件に対応したベクたちの動向を検討する理由も、上記の点にあり、清代の漢文史料を用いてベクたちの動向を明らかにする。

このような清代新疆史的な意義ばかりでなく、本稿には、ムスリム有力者が清朝統治下において如何なる動向を示したのかを究明するという、現地中央アジアに分析の視角を置いたアプローチを当該事件中のベクたちの動向に対して行うことを通じ、地域外より進出してきた異文化を有する王朝の統治下において活動した中央アジアの在地有力者が、王朝と現地社会の間であって示した動向の具体的な事例を明らかにし、在地有力者と地域外由来の王朝及び現地社会との関係性の一端に迫るといった中央アジア史的な意義もある。もちろん、ムスリム側の史料ではなく、清朝側の漢文史料に基づいた分析を進める本稿においては、王朝側の視点からベクたちの動向を浮き上がらせざるを得ないが、考察を進める段

階においては、ベクと現地ムスリム社会との関係に留意して作業を進める。

筆者は、以上のような問題意識に基づき研究（河野 2014：111-133, 2016：182（1）-155（28）, 2017：47-61）を進め、1826年から1827年にかけて起こったジャハーンギール<sup>7)</sup>（Jahāngīr, 1790-1828）の侵入事件、1847年に起こった「七人のホージャたち」の侵入事件、1857年に起こったワリー・ハーン<sup>8)</sup>（Walī khān, 1821-65）の侵入事件における清朝側のベクたちの動向に分析を加え、彼らが回兵（テュルク系ムスリム兵士）を動員して駐留清軍とともに防御にあたる様子を検討してきた。本稿においても、同様の問題意識に基づきつつ、さらなる事例研究を進めるために1830年に起こったムハンマド・ユースフの侵入事件におけるヤルカンドの状況に焦点を当てて、検討を進める。ヤルカンドは、回部の主要都市の一つであり、清朝が要塞都市を建設して大臣とその指揮下にある駐留軍を配置した重要な軍事及び行政上の拠点でもあった。このような政治的かつ戦略的な重要性を踏まえると、カシュガル・ホージャ家にヤルカンドを制圧されることは、回部に対する清朝の間接統治において大きな損害であり、この都市における防御の対応が成功するか否かによって、清朝にとっての事態の深刻度は著しく変化したものと考えられる。

本稿で主に使用する史料は、漢文史料である。清朝の政治に関する記事が年代順に編纂された『清実録』とくにムハンマド・ユースフが侵入した1830年の記事を含む『宣宗実録』（道光朝の実録）、またヤルカンドにおいて事件の対応に当たった清朝側の大臣である壁昌が著述した『葉爾羌守城紀略』（ヤルカンド防衛の記録）と『守辺輯要』（辺境防衛における重要事項に関する著作）を史料として利用する。なお、『葉爾羌守城紀略』の記述は具体的な日付を欠いている場合が多く、事態の時系列については、『宣宗実録』と『葉爾羌守城紀略』に見える戦況の推移を比較参照したうえで、推定により判断したことをお断りしておきたい。また、本事件中のヤルカンドの状況について具体的な記述を有するテュルク語史料は、筆者が確認し得た限りでは見当たらない。ただ、本稿の主な目的は、当該事件中において清朝側に協力したベクたちの動向を明らかにすることにあり、この限りにおいては漢文史料を用いた検討が有効である。

## 1. ムハンマド・ユースフの侵入事件の経過

ムハンマド・ユースフの侵入事件におけるヤルカンドの状況を検討する前に、先行研究（佐口 1963：468-488；Fletcher 1978：369-371；潘 1991：119-125；Newby 2005：153-160；潘 2011：148-153）に拠って、同事件の経過を概観しておきたい。

清朝は、ジャハーンギールの侵入事件を鎮圧した後、ホージャ家を支援したコーカンド・ハーン国に経済的な制裁を加え、コーカンド商人の追放と貿易停止による禁輸措置を行っ

た。コーカンド・ハーン国は、この清朝側の制裁により貿易に頼った経済に打撃を受けたが、事態を軍事力によって打開する方針を取り、カシュガル・ホージャ家のムハンマド・ユースフを擁して、コーカンド軍を出兵した。進軍には、コーカンドに身を寄せていた回部からの亡命テュルク系ムスリムも同行していた。さらに、進軍の途上で、クルグズの参加をも得た（参加を強いられた場合もあるようである）。彼らは、1830年9月25日に清朝版図内に侵入し、迎撃に向かったカシュガル駐留清軍の一隊を壊滅させた。9月28日にはヤンギ・ヒサル回城が陥落した。9月29日には侵入軍の包囲攻撃を受けたカシュガル回城が陥落し、9月30日からはカシュガル漢城も包囲された。その後、侵入軍は白山党支持者やドラン人<sup>9)</sup>の呼応を受けて、ヤンギ・ヒサル漢城、ヤルカンド回漢両城を攻撃しつつ、アクス方面にも展開した。しかし、コーカンド・ハーン国内の事情により、1830年12月23日にコーカンド軍は撤退した。その少し後で、ムハンマド・ユースフらもコーカンド軍の後を追った。このようにして、当該侵入事件は、3ヶ月ほどで終わった。

ところで、コーカンド軍とともに侵入したムハンマド・ユースフについては、佐口（1963: 479）が白山党支持者の扇動と内応を起こさせる精神的役割であったとする一方で、Newby（2005: 157-158）はムハンマド・ユースフが単なる名目上の指導者ではなくヤンギ・ヒサル漢城への攻撃においては一定の指導性を示したことを指摘している。また、本稿で扱うヤルカンドにおける状況について、潘（2011: 166）は、ヤルカンドを攻撃したのが亡命テュルク系ムスリムらが扇動して動員したヤルカンド付近の白山党支持者やドラン人であったことを指摘し、ヤルカンド地方における騒乱にホージャ家の信徒による反乱の要素を見出している。本稿における考究の対象は、ヤルカンドにおける状況であり、ヤルカンド地域における白山党支持者たちを中心としたホージャ軍の動向に留意して分析を進める。

## 2. ヤルカンドにおける清朝側の状況と侵入したホージャ方の指導者たち

### (1) 清軍と漢城の指導者

#### ① 清軍

回部を含む新疆に駐留する清軍は八旗兵と緑営兵である。本来ならば、八旗兵は將軍・都統・大臣の、緑営兵は提督以下の武官の指揮下にあつて、その指揮系統が異なる。しかし、新疆では実際の指揮・命令は八旗兵系統の大臣が行った（片岡 1991: 61-65）。ヤルカンドには、平時であれば1,001人（八旗兵300人、緑営兵701人）の清軍が駐留していた（片岡 1991: 65；小沼 2000: 26）。1830年当時の兵数については1,200名とする記録がある（『葉爾羌守城紀略』: 2a）。おそらく、何らかの増員が行われていたのであろう。

## ② 漢城の指導者

ヤルカンド漢城<sup>10)</sup>の指揮官は、八旗兵の指揮官が葉爾羌弁事大臣の壁昌(?-1854)であり、緑営兵の指揮官が参将の任貴邦<sup>11)</sup>(?-1837)であった。八旗兵系統の大臣である壁昌が、ヤルカンド駐留清軍全体の指揮に当たり、任貴邦はその指揮下にあって行動していたものと思われる。

### (2) 回兵と回城の指導者

#### ① 回兵

1830年時点のヤルカンドにおけるテュルク系ムスリム兵士すなわち回兵の設置状況は明らかではなく、常備兵として回兵が存在した形跡は史料上から確認できない。ただし、臨時的に招集された回兵については、壁昌がのこした『守辺輯要』に関連する記述がある。この記述によれば、「黒媽娃子」という無職で貧しいムスリムをアホンに指導させたうえで、ハーキム・ベクが彼らを集めて、回兵として動員しホージャ軍を迎撃させている(『守辺輯要』:21a-b)。この「黒媽娃子」は、潘(2011:167)が、正業に就かない一種のごろつきとして言及している「哈瑪娃子」と同じ人々を指すものと考えられる。「哈瑪娃子」については、『富興阿公牘』(『清代新疆稀見奏牘匯編』道光朝卷所収:197)に、賭博を行うとの記述がある。このため、「黒媽娃子」ないしは「哈瑪娃子」という言葉はテュルク語で「博徒」や「ばくち打ち」を指す「Qimār wāz」を漢字に写したものと推定できる。

#### ② 回城の指導者

1830年当時の回城の行政長官であるハーキム・ベクは、アブド・アッラフマーン(‘Abd al-Raḥmān, ?-1833)であった。彼は、乾隆帝より郡王品級多羅貝勒の爵位を与えられたホージャ・スィー(Khwāja sī, ?-1781)の第5子であるムハンマド・アリー(Muḥammad ‘Alī, 生没年不詳)の次子にあたる人物である(『西域同文志』11:33b;『回疆通志』12:16a-b;『新疆図志』21:2b-3a)。1827年、アブド・アッラフマーンはジャハンギールの侵入事件鎮圧に向かう清朝側の増援部隊の西進に従い、ヤルカンドの回復に当たっては清軍の前進に先んじて派遣され、彼はヤルカンドのアホンやベクたちを連れて来て、清朝側に帰順させることに成功した(『逆略』42:10b-11a, 道光7.4甲子)。アブド・アッラフマーンはこのままヤルカンドのハーキム・ベクの任に留まり、1830年のムハンマド・ユースフの侵入事件を迎えた。

また、高位の宗務者であるアールム・アホンはラップ・アッラー<sup>12)</sup>(Rabb Allāh, 生没年不詳)という人物であった。彼の子であるラフマット・アッラー(Raḥmat Allāh, 生没年不詳)が清朝側から褒賞を与えられており、父であるラップ・アッラーも清朝側に協

力したと考えられる（『宣宗実録』176: 6b, 道光10. 10 丙戌）。

### （3）ホージャ方の指導者たちと白山党支持者

『宣宗実録』によれば、ヤルカンドに進攻したホージャ方にはクルグズやコーカンドの人はおらず、回部からコーカンドへと亡命していたクルバーン・スーフィー・チャク（Qurbān Sūfī Chaq, 生没年不詳）、ヤークーブ（Ya'qūb, 生没年不詳）、カーシム・アホン（Qāsīm Ākhwund, 生没年不詳）ら3名の頭目がいた（『宣宗実録』178: 21a, 道光10. 10 戊申）。ただし、『清代外交史料』には、コーカンド軍の指揮官<sup>13)</sup>の一人であるムーサー（Mūsā, 生没年不詳）がコーカンド人1,000人余りを率いてヤルカンドの方へ向かったという情報もあり（『清代外交史料（道光朝）』: 394）、ヤルカンド方面に進攻したコーカンド軍が皆無であったとは思われないが、ヤルカンド方面においてはホージャ軍が主力を為したであろう。後述するようにサリコル<sup>14)</sup>（Sariqol）方面からヤルカンドに迫った別動隊も存在した。

ヤルカンドに所属する地域の中で、ホージャ方に従った農村として挙げられているのは、クル・タリム<sup>15)</sup>（Kul tarim）、タスキマ<sup>16)</sup>（Tasqima）、アジルトク<sup>17)</sup>（Ajirtqu）の三つの荘である（『宣宗実録』175: 29a, 道光10. 9 壬午）。潘（2011: 166）は、クルバーン・スーフィー・チャクラがヤルカンド付近の「白帽回荘〔白山党支持者の居住するムスリム農村〕」から白山党支持者を動員して1万人余りを集めたことを指摘している。おそらく、上述の三つの荘は白山党支持者が集住する農村であったのだろう。

## 3. ムハンマド・ユースフの侵入事件におけるヤルカンドの状況

ヤルカンドの状況を検討するに当たり、事態の推移を以下の(1)、(2)、(3)の三つの段階に分け、各段階における状況に分析を加える。(1)は、清朝側が防御態勢を整え、ホージャ軍の攻撃を防ぐ段階とし、(2)は、清朝側の一時的な反攻からホージャ軍による再度の攻勢を受ける段階とし、(3)は、清軍の増援部隊がヤルカンドに到着するまでの段階として、分析を進める。

### （1）清朝側の防御の対応とホージャ方の進攻

まず、ヤルカンドの西方のサリコルがコーカンド人約1,000名による攻撃を受けた（『宣宗実録』173: 10a-b, 道光10. 9 戊午）。また、サリコルにはクルグズが1,000人余りいたとの情報もある（『宣宗実録』175: 28b, 道光10. 9 壬午）。おそらく、この1,000名ほどの人々はコーカンド人とクルグズの混成部隊であり、ホージャ軍というよりはコーカンド軍

の別動隊であろう。

一方、清朝側の壁昌は、アブド・アッラフマーンとアホンたちを呼び出して、住民がホージャ方に参加することを防ぐように命令した（『葉爾羌守城紀略』：1b）。また、壁昌はアホンたちに以下のように命令した。なお、引用史料中の〔 〕内は筆者の注記であり、〈 〉内は筆者による訳文の補足であり、引用末尾の（ ）内に典拠を示した（以下、他の引用文中においても同様）。

さらにアホンたちに〈以下のように〉告げた。「聖人の漢経〔漢人の経典？〕は、理由なく人を殺すことを許していない。大皇帝の王法は、理由なく人を殺すことを許していない。お前〈たち〉の回経〔回教経典の略で、コーランのことか？〕もまたこのように教え諭している。もし賊によって人が殺されれば、これ〔賊〕を殺しても罪は無いことを、知らせなければならない。お前たちは回教の長上である。このとおりにムスリムたちに伝え知らせ、一緒に回城を守らせよ」と（『葉爾羌守城紀略』：1b-2a）。

以上のように、壁昌はベクではなく、アホンに住民動員を指示している<sup>18)</sup>。これはムスリムである住民たちを清朝側に立たせて回城を防衛させるためには、イスラームの宗教指導者であるアホンたちの協力が不可欠であったことを物語っている。

壁昌は、ヤルカンドの東北方、西方及び西南方に清軍とムスリムを駐屯させて防御させた（『宣宗実録』174：28b, 道光10.9壬申）。さらに、カシュガルからヤルカンドの東北方に進んできたホージャ軍に対し、壁昌は、武官の率いる清軍とベクの率いるムスリムたちを派遣して迎え撃たせたが、ホージャ方の勢いは衰えなかった（『宣宗実録』175：11a-b, 道光10.9戊寅）。

この間に、ヤルカンドの回漢両城で防御態勢が整えられ、両城が分断されて孤立することを避けるために、壁昌はアブド・アッラフマーンにアホンやベクたちとともにムスリムたちを率いて両城の間にある道路を守るように命じた（『宣宗実録』175：11b-12a, 道光10.9戊寅）。そして、1万人ほどのホージャ軍が東北方からヤルカンドに進み、回漢両城を攻撃したが、清朝側の反撃を受けて敗走した（『宣宗実録』175：12a-b, 道光10.9戊寅）。

## (2) 清朝側の反撃とホージャ方の再攻勢

敗走した東北方のホージャ軍はクル・タリム荘まで退いたものの、ホージャ方は西方のヤンギ・ヒサル方面からもヤルカンドへの進出を狙っていた（『宣宗実録』175：28b-29a, 道光10.9壬午）。その後、ヤルカンドの東北方においては参将任貴邦らの率いる清軍が、西方においてはシャン・ベク（現物納税の徴収を担当するベク職）であるユースフ



(Yūsuf, ?-1830) たちの率いるムスリムが、ホージャ軍の進攻を阻止した（『宣宗実録』177：32b-33a, 道光 10. 10 癸卯）。また、サリコル方面から進攻していた別動隊は、シフシュ<sup>19)</sup> (Shihshu) 莊五品ハーキム・ベクのサイド (Sa'id, 生没年不詳) らによって撃破された（『宣宗実録』176：6a-b, 道光 10. 10 丙戌；『宣宗実録』177：34a-b, 道光 10. 10 癸卯）。

他方、ヤルカンド回城の防備については、ベクたちから以下のような献策が為された。

すべてのベクたちがようやく皆で〈以下のような〉策を献じた。「考えてみるに、回城はいくぶん大きく、西方に漢城の官兵の後ろ盾があるが、その東南北の三方〈の備え〉には非常に空きがある。都市の北5里〔約3km〕にある亮嚙爾<sup>20)</sup> [Langar] の水路を切り開いて、その水を南に向かって回城の周囲に注ぎ、すべて仮の湖とし、そうすることで〈回城の備えに必要となる〉ムスリムの力を温存する。また官兵を派遣して回城内に分けて守備につかせることを求める」と（『葉爾羌守城紀略』：4a-b）。

つまり、漢城の援護を期待できない回城の東南北の三方において水路を決壊させて水を流し込み泥濘地帯とすること、また回城内への清軍の分遣を、ベクたちは壁昌に提案したのである。これに応じて、壁昌は清軍200名を回城に派遣した（『葉爾羌守城紀略』：4b）。このようなベクたちと壁昌の動向からは、回城と漢城が互いに孤立することを回避し、両城間において連携をはかり、協力してヤルカンド地域を防衛しようとする様子が看取できる。

この後、ホージャ軍の騎馬約600人と歩兵約7,000人がヤルカンドの東北方に集まると、アブド・アッラフマーンらは水路を決壊させて、彼らの接近を阻んだ（『宣宗実録』179：17b-18a, 道光 10. 11 庚申）。さらにホージャ軍は回城を攻撃しようとしたが、漢城から出た清軍や義勇兵そして商民、回城から出たアブド・アッラフマーンが率いるベクたちによって迎撃された（『宣宗実録』179：18a-b, 道光 10. 11 庚申）。ホージャ軍が敗走を始めると、回城から追撃部隊が出され、彼らがホージャ軍を四散させた。追撃にはバダフシャーなどの清朝版図外の出身者から成る騎馬隊も協力した（『宣宗実録』179：18b-19a, 道光 10. 11 庚申）。

### (3) 清軍の増援部隊の到着まで

ホージャ方の再攻勢を退けた清朝側は、ヤルカンドの周辺において反撃に出た。キョルチェック (Kölchäk, 生没年不詳) らが率いる回兵200名、さらにイブラーヒーム (Ibrāhīm, 生没年不詳) らが率いる回兵1,000名が派遣され、ホージャ軍と交戦している（『宣宗実録』179：44b-45a, 道光 10. 11 丁卯）。回兵を率いたこの兩名は、おそらくベクであろう。

カシュガルを占拠する侵入軍はヤルカンド方面における劣勢を知ると援軍を派遣した(『葉爾羌守城紀略』:6b)。『宣宗実録』によれば、1,000騎余りの軍勢がヤンギ・ヒサルから進攻しており、おそらく、この騎馬隊が侵入軍より派遣された援軍であったと思われる。この1,000騎余りの軍勢は、キョクラバート<sup>21)</sup>(Kökrabāt)の兵営を攻撃して、迎え撃ったシャン・バクのユースフラを破り、ヤルカンド周辺のホージャ軍と合流した(『宣宗実録』181:6b-7a, 道光10.12丙戌)。ホージャ軍はヤルカンドを囲んで攻めたが、清軍の応戦を受けて退いた。1830年12月19日頃に、烏魯木齊提督の哈豊阿(?-1840)らが率いる清朝の増援部隊がヤルカンドに到着し、ヤルカンド周辺のホージャ軍を打ち破った(『宣宗実録』181:7a-b, 道光10.12丙戌)。哈豊阿らが率いて来た増援部隊は、3,500人余りであったようである(『宣宗実録』180:29a, 道光10.11壬午)。この増援部隊の到着によりヤルカンドの回漢兩城は陥落を免れた。

#### 4. ヤルカンドのアホンの動向及びハーキム・ベクとの関係

以上に述べてきたヤルカンドの状況から、アホンたちが清朝側に協力し、ベクたちとともに防御の対応の指導に当たっていたことがわかる。ヤルカンドのアホンたちの動向については、事件の鎮圧に向かった増援部隊の指揮官の1人である哈浪阿(?-1849)たちの上奏文中に、以下のように記されている。

今回、ヤルカンドを通過して現地を調べた。賊がもうその場所の回城に突入してしまうと、アホンたちを頼って、『回教經典は良い人を殺すのを戒めており、賊を殺すことを戒めてはいない』と公言させた。それで城を固く閉ざし心を合わせて、徹底的に賊たちを殺し、かろうじて安定を得た。アブド・アッラフマーンがまじめに〈アホンの降格と昇進を行っていたので、こうなったのである(『宣宗実録』183:43a-b, 道光11.1辛巳)。

とあり、アホンたちが住民にホージャ軍迎撃を呼びかけ、都市防衛に貢献したことは明らかである。また、このようなアホンたちを選任したのがアブド・アッラフマーンであったことも見て取れる。このようにアホンたちがアブド・アッラフマーンを含む清朝側に与して防御の対応に協力した背景として一つには、ヤルカンドがかつて白山党と対立した黒山党の本拠であった点を挙げることができる。なお、カシュガルにおいては白山党のアホンであるミール・ホージャ(Mir Khwāja, 生没年不詳)という人物がホージャ側に参加して逃走しており(『宣宗実録』183:43b, 道光11.1辛巳)、カシュガルとヤルカンドではア

ホンの動向に違いを確認できる。すなわち、白山党ホージャの本拠であったカシュガルではアホンたちもムハンマド・ユースフに協力的であったのに対し、今は亡き黒山党ホージャの本拠であったヤルカンドにおいては、おそらくは白山党に対する党派的な対立関係からムハンマド・ユースフたちの侵入に反発し、アホンたちが清朝側の防御の対応に協力しているのであろう。

また、いまひとつの背景として、ハーキム・ベクであったアブド・アッラフマーンとヤルカンドの宗務者や住民との関係が良好であったと思われる点を挙げたい。前述したように、1827年に清軍がジャハーンギールの侵入事件を鎮圧する際に、アブド・アッラフマーンはヤルカンドのアホンやベクたちを清朝側に伴って来て帰順の仲介に成功している。さらに、テュルク語史料『ターリーヒ・ハミーディー』においては、アブド・アッラフマーンは恩恵ある統治者として描かれている（Mulla Musa 2007: 123-124）。そして、アブド・アッラフマーンの墓廟はヤルカンドにあるという（澤田 1999: 62-63）。

他方、清朝側のアブド・アッラフマーンへの評価も良好と言ってよい。まず、ヤルカンドの民心の掌握については、アブド・アッラフマーンはムスリムの心を得ており、彼の努力しだいでは今後もムスリム側の恭順的な姿勢を維持できるとの見通しを示している（『宣宗実録』176: 3a-b, 道光 10. 10 丙戌）。また、代々にわたって清朝のために尽力してきたとして、アブド・アッラフマーンの出自に信用を置いている（『宣宗実録』179: 26a-b, 道光 10. 11 癸亥）。

以上のように、ヤルカンドにおいてアブド・アッラフマーンは、アホンを筆頭とするムスリム社会、そして間接統治を行う清朝の双方から信頼を受けたハーキム・ベクであったと言える。このようなハーキム・ベクの存在が清朝当局とムスリムとの協力を円滑にし得たものと推測できる。

## おわりに

ムハンマド・ユースフの侵入事件におけるヤルカンドのベクたちの動向に注目し、ヤルカンドにおける清朝側の防御の対応に考究を加えた結果、以下のことが明らかになった。

第1に、清朝当局ならびにムスリム社会の双方から信頼を受けたハーキム・ベクであるアブド・アッラフマーン存在を挙げたい。ヤルカンドには、かつて白山党と対立した黒山党ホージャの本拠地であったという歴史的背景があり、白山党ホージャが侵入事件を起こした場合には、清朝側の防御の対応にヤルカンドのムスリム住民が協力しうる素地はもとも存在したのであろう。しかし、清朝側に協力的なアホンの存在はアブド・アッラフマーンの選任によるものと思われ、このようなアホンたちによってムスリム住民が動員され

たことを考慮に入れば、ヤルカンドの宗務者や住民との関係が良好であったと思われるアブド・アッラフマーンが、清朝当局と在地ムスリム社会との間に介在したことが、防衛の対応における清朝当局とムスリム住民との協力を円滑ならしめたものと推測できる。

第2に、清軍が駐留する漢城と隣接した回城のみならず、周辺の地域においてもベクたちによる迎撃や防衛が、ある程度まで奏功している点は注目される。シフシュ荘のハーキム・ベクであるサイドらはサリコル方面から進攻してきた別動隊を撃破した。キョクラバートに留まっていたと思われるシャン・ベクのユースフらは、ヤンギ・ヒサル方面からのホージャ軍の進撃を中途までは防いでいる。ヤルカンド地域において白山党がどの程度の影響力を有していたのかについては、確かなことは明らかになっていないが、回城以外の場所においても清朝側ベクたちの行動に実効が伴っているという事実は、ヤルカンド地域における白山党の影響力が大きなものではなかったことを示唆しているように思われる。

第3に、漢城と回城との間で連携を取ろうとする動きの見られることである。壁昌はアブド・アッラフマーンにムスリムたちを率いて両城の間にある道路を守るように命じている。また、回城の防衛に関するベクたちの献策においては、漢城にいる清軍の援護を期待できる回城西方の守備に対する危惧は見られない。この献策の中で、ベクたちは回城に清軍を分遣することも求め、壁昌はこれに応じて回城に清軍を派遣している。このような回漢両城の動向からは、互いに孤立することを回避し、両城間において連携をはかり、協力してヤルカンド地域を防衛しようとする様子が看取できる。

以上のように、ヤルカンドにおいてアブド・アッラフマーンらベクたちは、葉爾羌弁事大臣の壁昌の指示を受け、アホンたちの協力を得てムスリム住民を動員し、これらの住民や回兵を率い、バダフシャーンなどの人々の助力をも得て、清軍とともに防衛の対応に当たり、増援部隊が到着するまでヤルカンドの都市を防衛することに成功した。また、周辺地域においてもベクたちによる防衛がある程度は成功しており、ヤルカンドに所属する地域すべてがホージャ軍によって占拠されるという状況には陥らなかった。主要拠点である都市を防衛するという点のみならず、周辺地域の農村を守るという点においても、ベクたちは実効性のある対抗措置をホージャ軍に対してとっていたと言える。

また、アブド・アッラフマーンのようにムスリム社会と清朝の双方から一定の信用を得たハーキム・ベクの存在が、清朝の回部統治に安定性を付与していたと結論付けることもできるだろう。もちろん、本稿が依拠したのは清朝側の漢文史料であり、上記の結論も王朝側から見たアブド・アッラフマーンとムスリム社会との関係に過ぎない。ヤルカンドのムスリム社会の側から清朝とアブド・アッラフマーンがどのような存在と受け取られていたのかを究明することを試みる必要がある。今後の課題としたい。

## 謝辞

本稿には、日本学術振興会特別研究員奨励費（課題番号 26・5531）の成果が含まれております。

## 注

- 1) ムハンマド・ユースフはカシュガル・ホージャ家白山党のホージャであり、清朝の回部征服に抵抗したブルハーン・アッディーン（Burhān al-Dīn, ?-1759）の子であるサリムサク（Sarimsaq, 1755?-?）の長子にあたる人物であり、ジャハーンギールの兄にあたる。
- 2) 先行研究において、ホージャ家による回部への軍事行動は「聖戦」や「乱」などと表現されてきた。ホージャ家による清朝版図への失地回復運動は、白山党側から見れば「聖戦」、清朝側から見れば「乱」と表現することができる。また、近年では「侵入事件」と表現される場合もある（小沼・新免・河原 2011：107；小沼・新免・河原 2013：1-2）。本稿の目的は、これらのホージャ家による事件を「聖戦」や「乱」として捉え、その性格を見極めることにはないので、本稿においても「侵入事件」という表現を使用する。
- 3) 本稿と関連するタリム盆地周縁オアシス地域の歴史についての概説的な文献としては、佐口（1971：43-71）及び濱田（1998：97-119）がある。
- 4) 『中央ユーラシアを知る事典』（2005）の「アホン」の項目（31-32頁・新免康）によれば、アホンは、広義にはイスラーム法学や神学に通じた人を指すペルシア語であるが、テュルク語にも取り入れられ、タリム盆地周縁オアシス地域ではイスラーム宗教指導者を指した。
- 5) カシュガル・ホージャについては、『中央ユーラシアを知る事典』の「カシュガル・ホージャ」の項目（124-125頁・濱田正美）を参照されたい。
- 6) なお、潘（2006：67-75, 92-95, 111-116）にもホージャ家の侵入事件に関する言及があるが、これは潘（1991：90-101, 119-125, 156-163）と同じ内容である。
- 7) ジャハーンギールはサリムサクの次子にあたる人物。
- 8) ワリー・ハーンは、サリムサクの三男であるバハー・アッディーン（Bahā al-Dīn, 1793-1825）の子である。
- 9) 佐口（1963：449-457）によれば、ドラン人はホージャ・ジャハーンの旧属人とされた人々で、清朝は彼らを軍台当差回子として、ヤルカンドーアクス方面の軍台の雑務に使役した。そのため、彼らは清朝に不満を持っていたようである。
- 10) ヤルカンドの漠城は、1759年に回城内の西南の一角に建てられたが、1828（道光8）年にジャハーンギールの侵入事件後の善後策の一環として回城の西約2kmの地に新たな城塞が建設された（堀 1987：42；小沼 2006：31-32）。
- 11) 史料上からムハンマド・ユースフの侵入事件中のヤルカンドにおいて参将の任貴邦より高位の緑營兵系統の武官がいた形跡は見出しがたい。
- 12) 漢文史料におけるこの人物の漢字表記は「魯普拉」であり、筆者はこれを暫定的に「Rabb Allāh」と読んだが、この人名の読みは確実ではない。
- 13) この侵入事件に参加したコーカンドの指揮官については、佐口（1963：470-471）を参照されたい。
- 14) サリコルはヤルカンドの西方約460kmにあった（『新疆識略』3：36a）。
- 15) クル・タリム荘はヤルカンドの北約144kmにあった（『葉爾羌城莊里数回戸正賦各項冊』：106a；堀直 2004：98）。
- 16) タスキマはヤルカンドの東方約17kmにあるベシュ・ケント（Bāsh Kānt）荘に属する小荘である（堀 2005：169）。
- 17) アジルトク荘はヤルカンドの東方約46kmにあった（『葉爾羌城莊里数回戸正賦各項冊』：90a；

- 堀直 2004 : 98).
- 18) 回部におけるアホンとベクの指揮系統については不明な点が多い。ベク制度を介して回部を統治するという清朝側の官制上の制約から、漢文史料を見る限りにおいては、アホンがベクの管理下にあったように見受けられる場合もあるが、上記に引用した史料に見えるように大臣がアホンに指示を直接出している事例もある。清朝統治下におけるアホンとベクの指揮系統の解明には、地域差などを考慮しつつ事例研究を積み重ねる必要がある。
- 19) シフシユ荘はヤルカンドの西方約 173km にあった (『葉爾羌城莊里数回戸正賦各項冊』: 190a ; 堀直 2004 : 98)。
- 20) 回部のオアシスの交通の要路にテュルク系ムスリムの有力者が旅行者の利用に供するために建設した宿ないしは駅的な施設を Langar という (堀 1979 : 100)。この文中の「亮噶爾」は、このような施設がある土地を指しているのではないと思われる。
- 21) スタインの地図 (Stein 1928, Vol. 4, Maps, Serial No. 5 : Yangi-hissār, Yārkañd) には、ヤルカンドの西方約 32km の位置に「Kök-rabāt」という地名がある。

## 史 料

### 漢文史料

- 『守辺輯要』: 璧昌撰 (道光 20 年) 『守辺輯要』東洋文庫所蔵。
- 『葉爾羌守城紀略』: 璧昌撰 (咸豐 9 年) 『葉爾羌守城紀略』(『壁勤襄公遺書三種』所収) 東京大学東洋文化研究所所蔵。
- 『富興阿公牘』: 不著撰人 (1996) 『富興阿公牘』(『清代新疆稀見奏牘匯編』道光朝卷所収) 烏魯木齊: 新疆人民出版社。
- 『逆略』: 曹振鏞等奉勅纂 (1972) 『平定回疆剿擒逆匪方略』台北: 文海出版社。
- 『西域同文志』: 傅恒等奉勅撰 (1961) 『欽定西域同文志』東京: 東洋文庫。
- 『清代外交史料 (道光朝)』: 故宮博物院輯 (1968) 『清代外交史料 (道光朝)』台北: 成文出版社。
- 『回疆通志』: 和寧撰 (1966) 『回疆通志』台北: 文海出版社。
- 『宣宗實錄』: 賈楨等奉勅修 (1968) 『大清宣宗成 (道光) 皇帝實錄』台北: 華文書局。
- 『新疆識略』: 松筠修 (1965) 『欽定新疆識略』台北: 文海出版社。
- 『葉爾羌城莊里数回戸正賦各項冊』: 『葉爾羌城莊里数回戸正賦各項冊』東京大学東洋文化研究所所蔵。
- 『新疆図志』: 袁大化修・王樹相等纂 (1965) 『新疆図志』台北: 文海出版社。

### テュルク語

- Mulla Musa Sayrami (2007 [2010 (重印)]), *Tarikhi Hämidi, Näshrga täyyarlighuchi: Änwär Baytur*, Beyjing: Millätlar Näshriyati. (『ターリーヒ・ハミーディー』ウイグル語訳)。

## 参考文献

### 中国語文献

- 潘向明 (2011) 『清代新疆和卓叛乱研究』北京: 中国人民大学出版社。
- 潘志平 (1991) 『中亞浩罕与清代新疆』北京: 中国社会科学出版社。
- 潘志平 (2006) 『浩罕国与西域政治』烏魯木齊: 新疆人民出版社。
- 小沼孝博・新免康・河原弥生 (2011) 「国立故宮博物院所蔵 1848 年兩件浩罕來文再考」『輔仁歴史學報』第 26 期, 107-138 頁。
- 王希隆 (2012) 「張格爾之乱及其影響」『中国辺疆史地研究』第 22 卷第 3 期, 127-134 頁。

## 英語文献

- Fletcher, Joseph (1978) *The Heyday of the Ch'ing Order in Mongolia, Sinkiang and Tibet*, in John K. Fairbank, (ed.), *The Cambridge History of China*, Vol. 10, Cambridge: Cambridge University, pp. 351-408.
- Kim, Kwangmin (2016) *Borderland Capitalism: Turkestan Produce, Qing Silver, and the Birth of an Eastern Market*, Stanford; California: Stanford University Press.
- Newby, Laura (2005) *The Empire and the Khanate: A Political History of Qing Relations with Khoqand c. 1760-1860*, Leiden; Boston: Brill.
- Stein, Aurel (1928) *Innermost Asia : Detailed report of explorations in Central Asia, Kan-su and eastern Iran*, Oxford: Clarendon.

## 日本語文献

- 小沼孝博 (2000) 「換防兵制導入からみた清朝のカシュガリア支配」『社会文化史学』第41号, 19-6頁.
- 小沼孝博 (2006) 「ヤルカンド=オアシスに残る清朝支配期の史跡」『日本中央アジア学会報』第2号, 31-37頁.
- 小沼孝博・新免康・河原弥生 (2013) 「国立故宮博物院所蔵1848年コーカンド文書再考」『東北学院大学論集 歴史と文化』第49号, 1-24頁.
- 片岡一忠 (1991) 『清朝新疆統治研究』東京: 雄山閣出版.
- 加藤直人 (1977) 「「七人のホージャたち」の聖戦」『史学雑誌』第86編第1号, 60-72頁.
- 加藤直人 (1983) 「天理図書館蔵『伊犁奏摺』について」『史叢』第32号, 18-40頁.
- 河野敦史 (2014) 「「七人のホージャたち」の侵入事件 (1847年) におけるベクたちの動向 —カシュガルのベクたちによる防衛を中心として—」『内陸アジア史研究』第29号, 111-133頁.
- 河野敦史 (2016) 「ジャハーンギールの侵入事件における伊薩克の活動に関する一考察」『中央大学アジア史研究』第40号, 182 (1) -155 (28) 頁.
- 河野敦史 (2017) 「ワリー・ハーンの侵入事件 (1857年) とヤルカンド」『中央大学大学院研究年報 文学研究科篇』第46号, 47-61頁.
- 小松久男・梅村坦・宇山智彦・帯谷知可・堀川徹編 (2005) 『中央ユーラシアを知る事典』東京: 平凡社.
- 佐口透 (1963) 『18-19世紀東トルキスタン社会史研究』東京: 吉川弘文館.
- 佐口透 (1971) 「トルキスタンの諸ハン国」荒松雄 (他) 編『岩波講座 世界歴史13』東京: 岩波書店, 43-71頁.
- 澤田稔 (1999) 「タリム盆地周縁部イスラーム史跡調査報告」『帝塚山学院大学 人間文化学部研究年報』創刊号, 49-70頁.
- 濱田正美 (1998) 「モグール・ウルスから新疆へ —東トルキスタンと明清王朝—」樺山紘一 (他) 編『岩波講座 世界歴史13』東京: 岩波書店, 97-119頁.
- 堀直 (1979) 「清代回疆の交通事情 —軍台と卡倫を中心として—」『大手前女子大学論集』第13号, 95-107頁.
- 堀直 (1987) 「回疆都市ヤルカンド —景観的復元の試み—」『甲南大学紀要 文学編』63, 39-51頁.
- 堀直 (2004) 「清代「葉爾羌」の境域」『甲南大学紀要 文学編』134, 93-122頁.
- 堀直 (2005) 「清代ヤルカンドの農村と水路」『甲南大学紀要 文学編』139, 153-191頁.